



「看護のなかの人間」

大段 智亮 著

1. 著者について

この著者には、この本の他に、「病気の中の人間——医療の人間学序説——」（創元医学新書、昭和33年初版）、及び「人間の看護——現代看護の人間学序説」（創元医学新書、昭和43年初版）の主要著書がある。この間、一貫して把まえて離さないものは「医療における人間」であり、患者であり、医師であり、看護婦である。

医者や、その他の医療専門家でない著者が、どうしてかくも長く深く、このテーマと取り組んできたのか、私はその動機にまず大きな興味を持った。第1に病人としての体験が長いという。20歳の時から12年間肺結核に罹り、前後5回、6年間の入院生活の経験者である。したがって、「医学の専門家ではないが、病人の専門家」であって、このことが「医療における人間の問題」に入りこむ最大の原因であったと自ら語っている。第2に、著者の専門が教育学ないし教育人間学、とりわけクライアント中心療法によるカウンセリングを通じての「臨床科学としての人間学」であり、この立場から医療と人間の問題は最も興味深い研究課題であると述べている。

こうした本物の、深い動機に支えられながら、看護婦、保健婦の方々を対象として「看護人間学教室」と呼ばれる小グループの学習会を各地で開催し続けること5年余、その臨床経験の総まとめとなったものが、この著書である。

2. 概要について

この本は、内容的に5つに分かれている。

1) どんな立場から書かれているか。

著者の主張する「看護人間学」の立場を著者自身次のようにまとめている。①何よりもまず、患者として現代看護について率直に発言する立場、②臨床科学としての人間学を学んでいる者として発言する立場、③クライアント中心療法によるカウンセリングから、面接と対話の技法を看護関係者に学んでもらおうとする立場、④著者自身の他の経験である、産業界におけるリーダーシップの研究結果をも活用しようとする立場、⑤看護人間学教室から得た、きわめて実践的な立場。

2) 看護と人間性。

「人間相手」の仕事—これが看護であり、また「人間への助力」—これが看護であるとし、その「中身」を鋭く問う。かけがえのない「ひとりのひと」を相手とし、「助力」をする看護の立場は、深い「人間理解」の上に立つとする。また「助力」の方法を説く。

3) 看護と人間関係。

「チームワーク」の重要性と、「リーダーシップ」の看護における立ちおくれと必要性を、実際の例を掲げながら述べる。この本の圧巻で、小気味よい位看護の人間関係の悪い面を描き出してみせる。「看護を思うが故にいわずにいられない」というところか。

4) 現代社会と看護

「日本の現代社会では、看護という仕事は決して尊敬を受けていません」とまず直言し、「安かろう、悪かろう」看護の実態を次々と描き出す。それは、よくある「社会が悪いから我々は酬われないのだ」式の責任転嫁の姿勢ではなく、看護婦、保健婦の内側に果喰う問題点にも同時に触れ、「真に尊敬をうける仕事にしていけるのは、誰でもない、看護婦自身なのだ」と呼びかけ、著者は、「そのための手助けをしたい」という。

5) 人間の看護を打立てる為。

以上の指摘の上に立ち、その改善の方向を示唆する。「リーダーシップ」「調査と研究」「面接技術」その他、あらゆる面にふれ、最後に、「看護の未来」に期待し、看護婦自身心を狭くすることなく、ひろやかな心で活動してほしいと締めくくっている。

3. PT. OT. との関係

私は、この著書の「看護」の部分で、「PT, OT」に読みかえて最後まで一気に読み上げた。「クライアント中心療法」がどういう評価を受けているのか、専門外の私にはわからない。しかし「人間そのもの」を四六時中相手としなくてはならない我々リハビリテーションチームメンバーはひとり残らず、この本の中に出てくる看護婦のように、「人間理解の方法」「助力の仕方」「対話面接技術の方法」を、しっかり学習しなくてはならないのではないだろうか。と同時に、この著者のような真の助言者を、看護否医療界が持てたことに感謝をしなくてはなるまい。

B 6, 271頁, 980円, 川島書店
(都立心身障害者福祉センター, 作業療法士 寺山久美子)